主立った治水家（古代〜近世）

※ここでの「治水家」とは洪水防御のみならず、広い意味で水を治めるのに功があった人物をいう。プロデューサーであるか現場技術者であるかは区別していない。そのような人物は多数存在したと思われるが、ここではその一部だけを掲載している。

行基 ぎょうき（668-749）
和泉、摂津を中心に活躍。大阪・伊丹市の昆陽池（こやいけ）は行基がつくった溜め池といわれる。

空海 くうかい（774-835）
讃岐（香川県）生まれ。仲多度郡の満濃池が有名。

武田信玄 たけだ しんげん（1521-1573）
釜無川、笛吹川の治水で、信玄堤、万力林などが今も残る。

佐々成政 さっさ なりまさ（1536-1588）
尾張（愛知県）に生まれ、織田信長の属将となる。1580年、越中（富山県）に入国し、常願寺川に佐々堤（雁行堤）をつくったり、支川を鵈川（いたちがわ）と名づけ、両岸に堤防を築き、流域を開発した。

豊臣秀吉 とよとみ ひでよし（1536-1598）
淀川の文禄堤や大阪の太閤下水（背割り下水）。

伊奈忠次 いな ただつぐ （1550-1610）
三河（愛知県）に生まれる。徳川幕府の財政確立に貢献した。関東の治水・灌漑事業に腕を奮い、忠治、忠克と伊奈家3代で利根川の付け替えなどを行なった。

角倉了以 すみのくら りょうい（1554-1614）
京都の保津川、高瀬川、富士川の疎通など、息子の素庵とともに活躍した。

成富兵庫茂安 なりどみ ひょうご しげやす
（1560-1634）肥前（佐賀県）生まれ。佐賀の治水に力を尽くし「水の神様」といわれた。佐賀藩主、鍋島氏に仕え、文禄の役に参加、加藤清正の熊本城築城や家康の江戸市街修理などに参加した。

加藤清正 かとう きよまさ（1562-1611）
1588年に熊本城に入城。洪水を起こしていた菊池川、白川、緑川、球磨川の治水工事と新田開発を行ない、米の収穫高を25年間で3割増やした。清正を助けたのが普請奉行の飯田覚兵衛や、佐々成政に仕えていた大木土佐。また、滋賀県の石工集団・穴太衆（あのうしゅう）も肥後の治水に力を発揮した。

川村孫兵衛重吉 かわむら まごべえしげよし
（1575-1648）長州（山口県）萩に生まれ、毛利氏に仕える。関ヶ原の戦後、伊達政宗の家臣となる。現在も残る貞山堀（ていざんぼり）の開鑿や北上川改修を行ない、氾濫を防ぎ新田開発を行なった。

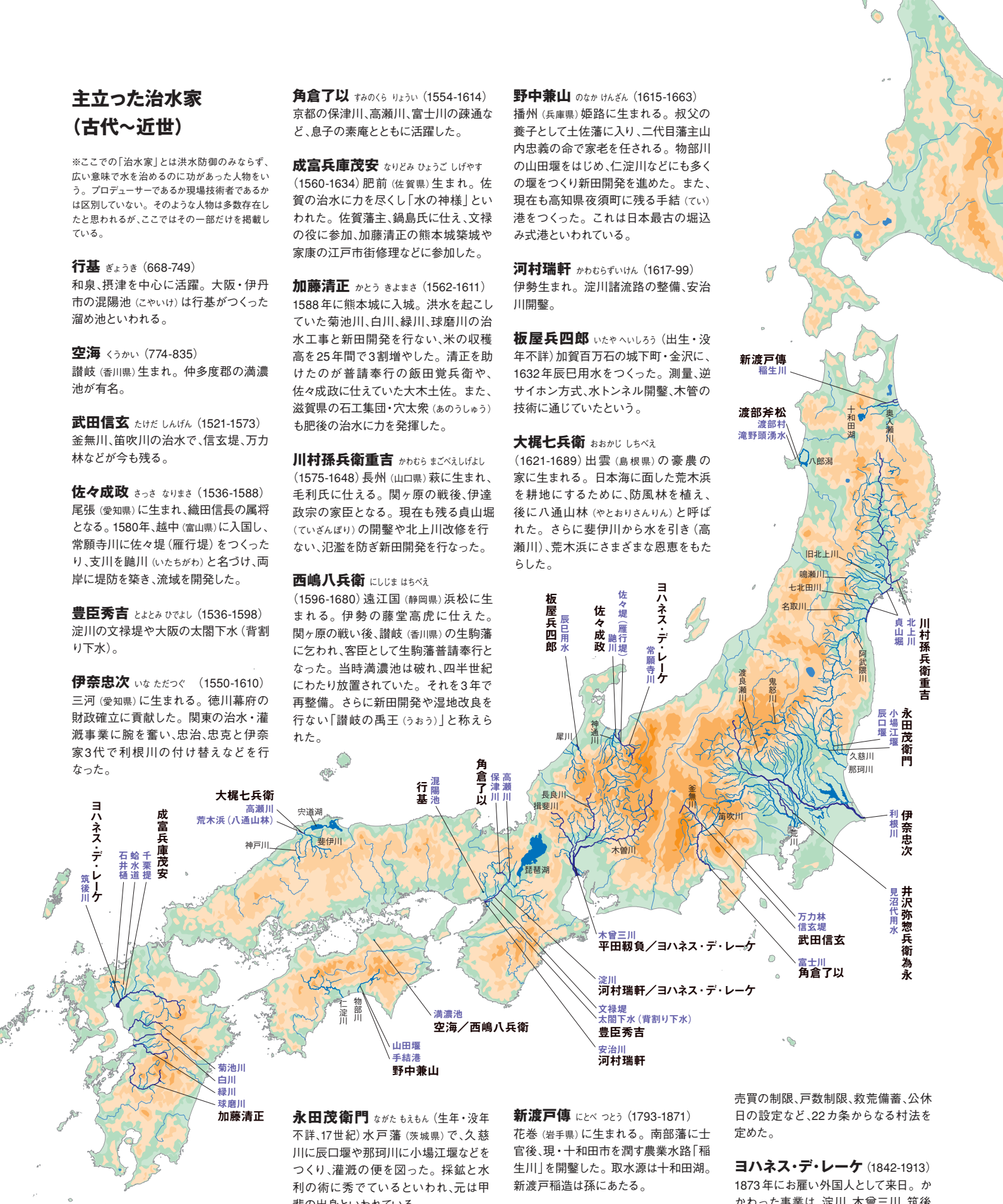
西嶋八兵衛 にしじま はちべえ
（1596-1680）遠江国（静岡県）浜松に生まれる。伊勢の藤堂高虎に仕えた。関ヶ原の戦い後、讃岐（香川県）の生駒藩に乞われ、客臣として生駒藩普請奉行となった。当時満濃池は破れ、四半世紀にわたり放置されていた。それを3年で再整備。さらに新田開発や湿地改良を行ない「讃岐の禹王（うおう）」と称えられた。

野中兼山 のなか けんざん（1615-1663）
播州（兵庫県）姫路に生まれる。叔父の養子として土佐藩に入り、二代目藩主山内忠義の命で家老を任される。物部川の山田堰をはじめ、仁淀川などにも多くの堰をつくり新田開発を進めた。また、現在も高知県夜須町に残る手結（てい）港をつくった。これは日本最古の堀込み式港といわれている。

河村瑞軒 かわむらずいけん（1617-99）
伊勢生まれ。淀川諸流路の整備、安治川開鑿。

板屋兵四郎 いたや へいしろう（出生・没年不詳）加賀百万石の城下町・金沢に、1632年辰巳用水をつくった。測量、逆サイホン方式、水トンネル開鑿、木管の技術に通じていたという。

大梶七兵衛 おおかじ しちべえ
（1621-1689）出雲（島根県）の豪農の家に生まれる。日本海に面した荒木浜を耕地にするために、防風林を植え、後に八通山林（やとおりさんりん）と呼ばれた。さらに斐伊川から水を引き（高瀬川）、荒木浜にさまざまな恩恵をもたらした。



永田茂衛門 ながた もえもん（生年・没年不詳、17世紀）水戸藩（茨城県）で、久慈川に辰口堰や那珂川に小場江堰などをつくり、灌漑の便を図った。採鉱と水利の術に秀でているといわれ、元は甲斐の出身といわれている。

平田靭負 ひらた ゆきえ（1704-1755）
薩摩（鹿児島県）に生まれる。薩摩藩家老として、木曾三川の分離（宝暦治水）を御手伝普請として成し遂げた。工事完成後自刃。薩摩藩士が植えた松は、千本松原となって現在も残っている。

新渡戸傳 にとべ つとう（1793-1871）
花巻（岩手県）に生まれる。南部藩に士官後、現・十和田市を潤す農業水路「稲生川」を開鑿した。取水源は十和田湖。新渡戸稲造は孫にあたる。

渡部斧松 わたなべ おのまつ（1793-1856）
秋田藩の足軽の子として生まれる。男鹿半島の寒風山山麓に広がる「鳥居長根」と呼ばれる原野を、滝野頭湧水から導水し開墾した。そこへの入植者を募り、新村を「渡部村」命名し、共存共栄、相互扶助の精神を柱に、田畑の小作と売買の制限、戸数制限、救荒備蓄、公休日の設定など、22カ条からなる村法を定めた。

ヨハネス・デ・レーケ（1842-1913）
1873年にお雇い外国人として来日。かかわった事業は、淀川、木曾三川、筑後川、等多数に及び、日本滞在は30年に及んだ。

井沢弥惣兵衛為永
いざわ やそべえためなが（1663-1738）紀州生まれ。紀州藩で土木・治水に力を発揮する。八代将軍徳川吉宗が紀州より呼び寄せた。見沼溜井（現・埼玉県）の新田開発を目的に、利根川を水源に見沼代用水を開鑿した。

参考文献：松浦茂樹『国土づくりの礎』（鹿島出版会 1997）／緒方英樹『人物で知る日本の国土史』（オーム社 2007）／「水土を拓いた人びと」編集委員会・（社）農業土木学会編『水土を拓いた人びと』（農山漁村文化協会 1999）